

身体フェミニズムと先住民フェミニズムから考察する身体 (中間報告)

合場 敬子 野口 久美子

本共同研究の目的は、合場(2013)が提唱した「身体フェミニズム」の思想と実践を、女子高生の身体研究と野口が探求する「先住民フェミニズム」の思想から深めることである。本研究の初年度となる2019年度は個別研究に特化し、合場は神奈川県下の私立高校1校を選び、主に高校1、2年生の女子及び男子高校生を対象とし、合計43名(女子32名、男子11名)にインタビューを行った。また野口は先住民社会の「身体」について扱った人類学的研究の収集分析に加え、先住民女性権利団体WARNの活動とそこで中心的役割を担った先住民女性アクティビストらの活動理念について一次資料、二次資料の収集と分析を行った。以下、I 合場、IIは野口による研究報告である。

I. 身体フェミニズム研究

神奈川県下の私立の男女共学の南風高校(仮名)で、女子生徒を対象に実施したインタビューの内容と参与観察の中で、化粧実践に関する部分を分析した。下記に登場する生徒の名前はすべて仮名である。

1. 参与観察で認められた女子高生の化粧実践

南風高校に通い始めて2日目、フィールドワークを終えて、高校の前のバス停に並んでいた。すると、私の隣に女子高生が一人並んだ。彼女は小さいコンパクト状の鏡を見ながら、筆を使って少しずつ真赤な口紅のようなものを塗っていた。しかし、口紅を塗ったはずの彼女の唇はそんなに赤くなっていない。化粧をしない筆者にとっては、ただただ不思議だった。後で調べてみると、筆者が口紅だと思ったのは、色がつかなかった点と容器の形状からみて、リップグロスだったと思われる。リップグロスは主につやをだすためにつける化粧品で、色はつかないのだ。

その後、南風高校を訪問するたびに、唇が赤い女子生徒を何人も見かけるようになった。毎週必ず授業観察をしていた、2年生の4つのクラスでは、同じ女子が赤やピンクの色つきリップクリーム(以下色つきリップ)を塗っていた。なぜ口紅ではなくリップだと思うかというと、インタビューで、色つきリップを学校でつけていると多くの女子生徒が答えていたからである。2年生の全クラスが位置している階には、男女別のトイレが1カ所あった。その女子トイレに休み時間に行くと、大抵洗面台の鏡に向かって、一人か二人、色つきリップやリップグロスをつけている。また、だれもいなくても、色つきリップの破片が洗面台に落ちていたことがある。ある時は、2年生の女子生徒が眉毛にプラスチック容器から筆で黒い色を塗っていて、おそらくアイブローを塗っていたのだと思われる。女子トイレ以外にも、教室で眉毛を描いた

り、色つきリップを塗ったりする女子生徒がいた。もともと、乾燥を予防する薬用リップは多くの女子生徒が教室で塗っているの、色つきリップを塗っていたとしても目立たない。2学期から授業観察を始めた1年生のクラスの近くのトイレでは、リップを塗っている女子を見かけなかった。2年生のクラスと違い、1年生の4つのクラスだけがそのトイレを使っていたからかもしれない。他の1年生のクラスが使うトイレでは、2年生のトイレと同じような光景が展開していた可能性があるが、インタビューに応じてくれた1年生は総じて学校では化粧をしていないと答えていたので、学校で化粧をすることが増えるのは、南風高校の場合、2年生からだとも推測される。

インタビューで、今化粧しているのかと聞くと、ちょっとためらいながら認めて、話し出す生徒がいた。祐実は化粧している？と聞いても、すぐに答えなかった。先生に言わないからと促すと、話はじめた。環奈は、「これ、大丈夫かな。(笑い)聞こえてないかな」と周囲を気にする様子を見せたが、化粧をすることが好きなこともあり、具体的に教えてくれた。南風高校では正式な校則というものがなく、化粧を禁じる明確な規則はないが、教員の生徒指導の文書には「化粧は、直ちに落とさせる。」と記述されている。インタビューした女子生徒たちによると、先生が女子生徒の化粧を発見すると、メイク落としで直ちに落とさせるのだという。後述するように、生徒によっては色つきリップを塗るだけでなく、それ以外の化粧もしているのだが、色つきリップは見つけやすいし、メイク落としで落としやすいこともあり、先生たちはもっぱら色つきリップをつけている生徒を指導しているようだ。

2. 化粧実践の有無と状況

インタビュー内容を分析した結果、女子高生が4つのグループに分けられることが明らかになった。Aグループは学校の内外で化粧をしている。Bグループは、学校ではしないが、学校外ではする。Cグループは学校の内外で化粧をしない。Dグループは学校では化粧をするが、学校外ではしない。表1は生徒ごとに、どのような実践をしているかを示している。

Aグループの学校での化粧は、時々する生徒から毎日する生徒というように生徒によって頻度が違う。また毎日する生徒の中でも、顔の血色を良くするため色つきリップだけを塗る生徒(奈々)から「がっつり」する生徒(環奈)まで多様性がある。このグループで、最も多くの種類の化粧をしていたのが環奈だった。眉毛を描き、下地、ファンデーション、マスカラ、リップを塗っていた。学校でファンデーションを塗っている生徒は、インタビューした生徒の中では、環奈だけだった。「お化粧品すごい¹(合場：強調)数持ってて。多分ファンデーションでも20種類以上持ってんですけど。(笑い)いろいろ試して、あ、この色がいいとか、あとどれが一番もつとか、あとどれがくすまないとかどれが肌きれいに見える」とかという「試行錯誤」を繰り返し、今では「肌がきれいだねって言われるようになったりとかあと肌白いねとかまああと可愛いとかは、言われる」ようになった。筆者が学校で環奈を見かけたときは、白い肌をしているなどは思ったが、まさか化粧、それもファンデーションを塗っているとは気がつかなかった。

Bグループは化粧を学校ではしないが、学校外では化粧を実践したり、楽しもうとしている。

化粧を学校でしない理由は大きく二つに分けることができる。一つは、学校が生徒指導で化粧を禁止したり、親から化粧はすると言われていたという、自分の行動を規制できる対象から禁止されているという理由である。もう一つは、化粧自体が引き起こす事象による理由である。前者の理由の例としては、香織が該当する。彼女は、「学校の、制服とか、着てるときは、絶対にしないです」と断言する。その理由は、

親から、やっぱ言われてるんですよ。……しないでよみたいな……なんかこう周りは結構、つけてる子が多いので……ちょっと言っちゃあ悪いけどあんな感じになっちゃ駄目だよみたいな、チャラくなっちゃ駄目だよみたいなことを、言われずと前から言われてそれで自分の気持ちも、なんか、絶対つけないってなりました

と説明する。化粧を勧めたり、黙認したりする親が多い中で、学校での化粧はダメとはっきり禁止する親は、インタビューをした女子生徒の親の中では香織の親だけだった。

後者の理由の例としては、珠梨が該当する。彼女は「ものすごく肌が弱くて、あのつけれるものがほとんどないんですね。それで、あと、つけて、あの痒くなったり赤くなったりするのがすごい怖くて、つけられない」からである。星羅はクラスメートのある女子を見て、学校では化粧をしないと決めた。それは学校で泊まりがけの行事があり、

そのときにメイクしてる子が寝るまで、うん1回シャワー入ってもでもメイクし直して、で寝るときもメイクしてて、朝落としてまた塗り直してって、そこまでする子がいるんで、自分も……やっぱり人の目気にするから、あえてやっぱりやらないほうがいいんじゃないかっていう

気持ちになったという。

Cグループは、学校の内外で化粧をしない。さらに、このグループ内で、化粧に興味がある生徒と化粧に興味がない生徒に分かれる。瞳は化粧に興味はあるが、していない。理由は、「あんまり肌が、強くないので、化粧品を選ばないとすごく、かぶれちゃったり」するからだ。夏海は化粧に興味がない。彼女は化粧を「なんか、気持ち悪い。」と表現した。化粧することを、このように率直に否定的に断言したのは彼女だけだった。

いとこの結婚式のときに、(化粧を) やってもらったんですけど、顔が、なんだろ。はっきりしたメイクをさせられて、なんかすごい自分で、怖い、顔見たときに(笑い)、こんな変わっちゃうんだっていうのちょっとびっくりしちゃって、で、なんか、自分は化粧似合わない顔なのかなとか思って(笑い)。で、お家(うち)帰って落とした瞬間なんか、顔にいろいろ塗られたのが取られて、すっきりして。なんで、お化粧は、あんまり好きじゃないです。

ときっぱり答える。一方で、「大人になったら、そのやらなきゃいけないじゃないですか。(笑い) マナーとして。なんで、まやらなきゃなーとは思ってるんですけど、しなくてもいいなら、したくないなっていう感じ。」と答える。

Dグループを構成するのは、里実一人である。里実は、学校にたまに「赤っばい口紅を塗って、きたりとか、するくらい」と語る。ここでは口紅と言っているが、筆者が確認したら、色つきリップのことだった。彼女が所属しているクラスの女子の多くが化粧をしているので、彼女が「なんか浮いてるみたいな感じ」になっている。しかし、そのことで「なんか言われたりはしない」し、「自分は、しない子って多分周りから思……われてるので、そういう面では、別に無理してしなくてもいいのかなっていうのも」ある。このように逡巡する気持ちを語った後、実は「ま正直、化粧はしたいんですけど。」と語る。しかし、「なんて言うんだらう。自分の顔がやっぱ嫌いなので」と語り、嫌いな理由は自分の目が一重だからと教えてくれた。「自分一重なので、なおさら、それ、二重にしてからメイクをしたいっていう気持ちがあって、まず、二重になってないのに化粧するのどうかなって」思っているからだ。

2020年度は、上記の4つのグループごとに、化粧実践の内容をより詳細に分析し、さらに女子高生たちがどのような化粧に関する言説を使いながら、化粧をすること/しないことを表現し、それを自らの女性性にどのように結びつけているかについて検討したい。

注)¹ 太字のところは発話者が強調して話していることを示す。

表1 インタビュー対象者の化粧実践

グループ	該当する生徒の名前
A	華、祐実、爽、真由、恋歌、有栖、奈々、日菜子、翔子、未来、静香、環奈、寧音、杏那、亜実
B	有里子、結衣、明衣、紬、香織、珠梨、希、藍、星羅、玲、純
C	恵、瞳、貴絵、真実、夏海
D	里実

〈文献一覧〉

合場敬子 (2013) 『女子プロレスラーの身体とジェンダー—規範的「女らしさ」を超えて』明石書店

II. 先住民族フェミニズム研究

2019年の4月から9月まではアメリカ合衆国の先住民復権運動とフェミニズム運動において、国家による先住民女性に対する強制断種と強制的養子縁組制度を批判し、「家族を作り維持する権利」を主張した先住民女性権利団体WARNの活動とそこで中心的役割を担ったWinona LaDukeの活動理念について一次資料、二次資料の収集と分析を行った。

2019年9月から2020年3月までは、WARNやLaDukeらにみられるある種の急進的活動が、実際の先住民保留地や部族の活動にどのような影響を与えたのか、カリフォルニア州の4つの保留地 (Tule River, Pechanga, Santa Rosa, Cabazon) の具体的とりくみについて調査を行った。

現地調査や部族成員、部族政府関係者、部族児童福祉局職員らに対するインタビュー調査の結果、WARNやLaDukeらの活動理念が、近年のインディアン・カジノ産業が先住民社会にもたらした経済発展を背景に、部族裁判所の整備、ソーシャルワーカーの育成、部族家族福祉局の設置、部族が管理する里親制度、養子縁組システムの構築へと引き継がれていることが分かった。こうした状況からは、国家が管理し、排除の対象となってきた「先住民の身体」が、1990年代以降、部族が管理し、部族的価値観のもとで保護対象となってきたという変化が明らかである。後者には、先住民的家族像や先住民女性の身体への敬意や恐れ、信仰が色濃く反映されている。以上の研究結果から、先住民の女性や子どもの身体が「先住民部族」の手に取り戻されつつあるという現状を、1960年代以降のマイノリティ復権運動の実践的成果として確認することでできた。だが同時に、部族アイデンティティや部族システム（部族ナショナリズム）が女性や子ども個人にもたらす統合と排除の理論について、近年、新たな問題を生み出していることが分かった。

加えて、本年度は、以上の現地調査をより広い歴史的文脈に位置付けるため、先住民社会の「身体」「帝国主義」「脱帝国主義運動」に関する文献収集を行った。文献調査については、今後行う先住民フェミニズム理論と実践に関する執筆活動につなげていきたい。今年度における以上の研究成果については、野口久美子『インディアンとカジノ』（ちくま新書、2019年11月刊行）、Kumiko Noguchi “Keeping the Indian Tribal Community Together: Nation Building and Cultural Sovereignty in the Indian Casino Era” *Journal of American Studies* (2020年6月掲載予定)、野口久美子「もう一つのレッド・パワー運動：インディアン女性活動家による『アメリカの家族像』批判」（関西アメリカ史研究会、2019年5月26日）等で報告した。

最後に、2020年6月には、ナバホ先住民教育を専門としているアメリカ合衆国オクラホマ州ノーザン・ステイト大学のFarina King氏を招へいた研究会を開催予定であったが、新型コロナウイルスによる渡航規制の影響で中止となったことを付け加えておきたい。現在のところ、来年度の開催を予定している。